

レクチャーコンサート 東アジアの琴

—韓国・日本・中国における「琴」の響き—

東アジアの文化を象徴する「琴」は、古代より人々の精神世界と密接に結びついてきた弦楽器である。韓国の伽倻琴（Gayageum）、日本の箏（Koto）、中国の古琴（Guqin）は、いずれも宮廷音楽や文人文化の中で洗練され、地域固有の美意識を体現する芸術として発展してきた。伽倻琴の柔らかな揺らぎと即興性、箏の端正で透明な響き、古琴の深く静謐な音色は、いずれも演奏者の呼吸・心情・身体性がそのまま音へと反映される楽器特性をもち、技巧よりも精神性が重視されてきた点で共通している。一方で、それぞれの構造、調弦法、音律体系、演奏姿勢には大きな違いがあり、そこには韓国・日本・中国の音文化が長い歴史のなかで形成してきた価値観や自然観、美学の差異が織り込まれている。こうした共通性と相違性が並存する点こそ、琴という楽器の魅力を際立たせている。

さらに、三国の琴は時代の変化に応えながら、新たな芸術表現を生み出す創造の媒体としても重要な役割を担ってきた。近代以降、楽器の改良が進み、音域や表現力が大幅に拡張され、多様な舞台芸術や創作音楽で用いられるようになった。これにより、伝統音楽だけでなく、現代音楽、映像音楽、国際共同制作など、多方向へ広がる音の実践が可能となり、琴は東アジアにおける音楽文化の広がりや更新を象徴する存在ともなっている。

本レクチャーコンサートは、こうした三国の「琴」を一堂に紹介し、それぞれの音色や演奏法の比較を通じて、音楽を媒介とした文化の交錯と変容を考察する試みである。単に音を並べて紹介するのではなく、楽器の構造、音律、歴史的背景、演奏美学の解説を各国の専門家がを行い、実演と講義が有機的に結びつく構成としている。これにより、来場者が「聴く」「観る」だけでなく、「理解する」「考える」プロセスを通して三国の琴文化にアプローチできる場となることを目指している。

本企画は、韓国国外文化遺産財団の支援を受け、三年にわたり継続して実施してきたレクチャーコンサート・シリーズであり、本センターが推進する「東アジアにおける音楽文化交流と記録の近代史」研究とも連動している。これまでの取り組みでは、東アジアにおける音楽文化がどのように記録され、継承され、時に変容してきたのかを明らかにすることを目指してきた。今回の公演は、その成果を社会へと還元する実践でもあり、音を“聴く”という行為を通じて、異なる文化がどのように響き合い、また独自の美意識を育んできたのかを体感できる貴重な機会となるだろう。

🇰🇷 伽倻琴（カヤグム）

金オル（Kim Eol）

韓国・梨花女子大学 韓国音楽科卒業（カヤグム専攻）。黄秉冀（ファン・ビョンギ）、郭銀兒（クア・ウナ）、曹侖廷（チョウ・ユンジョン）に師事。現在は日本を拠点に、アジア各国で演奏活動を展開。12 絃・25 絃カヤグムの両方を自在に操る数少ない奏者として知られる。2025 年、李在明大統領来日時（在日同胞講談会）にてソロ演奏を披露。現在、「金オルカヤグム教室」（東京・名古屋）主宰。駐日韓国文化院 世宗学堂カヤグム講座講師。

■ 楽器紹介

伽倻琴（カヤグム）は、朝鮮半島を代表する伝統弦楽器で、12 本の絹弦を指で直接弾く。左手で弦を押さえて音の高低や揺らぎを生む「弄絃（ノンヒョン）」が特徴で、柔らかく深い響きを持つ。古典音楽（正楽）から民俗音楽（散調）、さらに改良型 25 絃による現代曲まで、多彩な音世界を展開する。

■ 演奏曲目・解説

1. 千年万歳（천년만세） — 正楽カヤグム

朝鮮王朝の宮廷音楽を代表する曲で、長寿と繁栄を祈る儀礼音楽。

2. カヤグム散調（가야금산조） — 散調カヤグム

即興性を重んじる独奏曲形式で、演奏者の感性によって旋律が変化する。

3. トラジ（도라지） — 改良カヤグム

朝鮮民謡「桔梗の花」を題材にした現代的編曲。古典とポピュラーの融合を象徴する作品。

🇯🇵 箏（Koto）

木村麻耶（きむら まや）

橋本はるみ、野坂恵子に師事。幼少より国内コンクールで多数受賞。北海道新聞社賞、釧路奨励教育長賞、別海町文化奨励賞、第 54 回釧新郷土芸術賞受賞。国内外で演奏活動を行い、審査員・作曲活動にも携わる。オリジナル CD 《光る空》を発表。

吉澤延隆（よしざわ のぶたか）

第 15 回賢順記念全国箏曲コンクール第 1 位・賢順賞受賞。東京文化会館ワークショップ・リーダー。異分野の芸術家と連携するコンサート・プロジェクト「NOBU-LAB.」主宰。滋賀県立文化産業交流会館「邦楽専門実演家養成事業」講師。

■ 楽器紹介

日本の箏は 13 本の絃をもつ日本を代表する撥弦楽器で、古くは雅楽の一部として伝来し、江戸時代に盲人音楽家によって独自の箏曲文化が成立した。低音を支える 17 絃箏（宮城道雄の発明、1921 年）などの改良を経て、現代邦楽や創作音楽にも幅広く用いられている。

■ 演奏曲目・解説

1. 千鳥の曲（吉沢検校 作曲）

雅楽音階を取り入れた「古今調子」で書かれた代表作。『古今和歌集』『金葉和歌集』の千鳥を詠んだ和歌を歌詞に用い、静寂の中に響く余韻が日本の情緒を醸す。

2. カレイドスコープ（木村麻耶 作曲）

即興的なリズムと音色の変化を軸に展開する現代作品。万華鏡のように変化する音の世界を通して、箏の新たな表現領域を示す。

🇨🇳 古箏 (Guzheng)

毛丫 (Mao Ya)

北京生まれ。中国・中央音楽学院卒業後、東京藝術大学大学院修士・博士（音楽学）取得。同大学研究員、非常勤講師、米国コロンビア大学研究員を経て、現在、東京音楽大学特任教授。独自の転調箏「WS 移柱転調箏」を考案。劇場型器楽ミュージカルを創作し、バンド「TG Band」を結成。カーネギーホール・メインホールでソロ公演を開催。即興演奏アルバム『荒城の月』で全米独立音楽賞ノミネート、世界音楽賞銀賞受賞。

■ 楽器紹介

古箏（ゲージェン）は2500年以上の歴史を持つ中国の撥弦楽器。本体は桐製（全長約163cm）で、21本の弦を持ち、右手で弾き、左手で弦を押して音高を変える。半音を含まない五音音階を基本に、D・G・Cなど複数の調性を使い分ける。伝統的には独奏・二重奏・糸竹楽合奏に用いられ、近年はピアノやオーケストラとの協奏でも活躍している。

■ 演奏曲目・解説

1. 高山流水（浙江派古典曲）

春秋時代の琴士・伯牙と鐘子期の「知音」伝説に由来。雄大な山と澄んだ水を象徴に、人と自然、心と心の共鳴を描く中国音楽の代表曲。

2. 溟山（神秘なる山） 作曲：王中山

中国湘西地方の民俗音楽を素材に、現代的作曲技法で構成された作品。山の霊性と自然の生命力を描き、1996年、毛丫が中央音楽学院で初演。以来、全国音楽学院で模範演奏とされ、古箏教育の必修曲として定着している。

【日時】 2025年12月16日（火）15:10～16:40

【場所】 東京大学駒場キャンパス駒場コミュニケーション・プラザ「舞台芸術実習室」

【申請方法】 参加費無料（定員30名）、ただし 12月14日（日）までに参加登録が必要です。

事前参加登録はこちらから → <https://forms.gle/MQgWnJFTmrNfU5b17>



※ 参加は、定員になり次第、申し込みを締め切らせていただきます。

※ お問い合わせ cks@iags-cks.c.u-tokyo.ac.jp（東京大学韓国学研究所センター事務局）

主催 東京大学韓国学研究所センター

後援 韓国国外所在文化遺産財団